

Sound Emotion

まよっちゃった

女の子

青年

女の子「あれ、また同じとこにでちゃった。おっかしいなあ、さっ

きと反対のほうにいったはずだったんだけど・・・

反対で同じだったら、つぎは反対の反対・・・って、それ

じゃあ元通りになっちゃうよ！ うーん、よくわかんない

けど、考えてるより、進むしかないよね。」

女の子「・・・また同じとこかあ。あー、こんなとこでまよってる

場合じゃないんだけどなあ。どうしよう、足は痛いし、つ

かれたし・・・もうだあー！！！」

青年「そこにだれかいるのかい？」

女の子「へあっ！！」

青年「あ、ごめん。おどろかせちゃったかな。」

女の子「え、あ、あの、その・・・あ、あなた、どこからきたの！？」

青年「どこからもなにも、声が聞こえたから、なにかあったのか

なって見にきたただだよ。」

女の子「そう・・・わたし、そんなにおつきい声だしてた？」

青年「少なくとも、ぼくに聞こえるくらいはね。」

Sound Emotion

女の子 「やつ、はずかしい・・・」

青年 「気にしないで。それにしても、こんなところでどうしたんだい？ このあたりで人に会うことなんて、滅多にないんだけど。」

女の子 「じつはわたし、おつかいの途中で。この森をぬけたら近道になるからって、ずっと歩いてたんだけど、ぜんぜんぬけられなくなっちゃって。同じとこに何回も帰ってきちゃうし・・・えへ、まよっちゃったみたい。」

青年 「そうだったんだ。どこに向かおうとしてたの？」

女の子 「えっと、ラークリーって街。」

青年 「ラークリー？ ずいぶん遠くまでいくんだね。」

女の子 「そうなの。だから急がなきゃって思って、ぬけ道通ろうって。でもこれだったら、遠回りしててもあんまり変わんなかったよね・・・」

青年 「わかった。とにかく、森をぬけるまでぼくが送っていくよ。」

女の子 「え・・・いいの？」

青年 「だって、まよっちゃったんでしょ？ このまま置いていけないよ。」

女の子 「やったー、ありがとう！・・・あ、ございます！ ふつつかものですが、どうかよろしくお願いします。」

青年 「やだな、かたってくるしすぎるよ。さ、いこう。」

女の子 「はい！」